

例会参加報告

汽水域研究会第6回例会(松江)

汽水域研究会第6回例会が、2018年1月6日(土)~7日(日)の2日間、島根大学で開催されました。今回は「汽水域研究センター」が「エスチュアリー研究センター」へ改組されてから初めての「島根大学 エスチュアリー研究センター 第25回新春恒例汽水域研究発表会」との合同開催となりました。島根大学の副学長である秋重幸邦理事が開会の挨拶をなされ、京都大学生態学研究センターの中野伸一教授、神戸大学大学院工学研究科の中山恵介教授、東京大学大学院理学研究科の多田隆治教授、3名の方々から、新センター発足にむけたお言葉と最新のエスチュアリー研究に関する講演をいただきました。

一般講演・常設セッションでの「汽水域一般」8件、「水圏生態研究」11件、「流動解析」3件、「環境変動解析」10件の発表に加え、スペシャルセッション「完新世における汽水域及びその周辺地域の環境変遷史 2018」9件と「中海の環境改善の取り組み」8件、「エスチュアリー研究センター改組記念シンポジウム」など、合わせて56件という盛りだくさんの発表数で、本汽水域研究会からも11名の会員が発表を行いました。特に2つのスペシャルセッションでは、学際的な取り組みによる汽水域研究や環境変動解析を代表するようなテーマであったことから、共に盛況で活発な議論が行われました。

恒例となった、優秀な学生発表者へ授与される「汽水域研究会賞」「エスチュアリー研究センター賞」の審査も行われ、多くの聴講者が評価者として熱心に参加しました。

2日間で県内外からのべ250名という多くの来場者が集い、7日夕方の三瓶良和汽水域研究会会長による閉会の挨拶により、熱気に満ちた本会は幕を閉じました。今年の例会を通して、汽水域を軸とした研究連携の更なる発展や、地域に密着した汽水域研究の成果と発信に対する、要望も含めた期待の高さを改めて実感させられました。



写真1. 「エスチュアリー研究センター」の紹介を行う齋藤 文紀センター長



写真2. 東京大学大学院理学研究科の多田隆治教授による講演

(エスチュアリー研究センター 船來 桂子)
(写真: エスチュアリー研究センター 南 憲吏)

特集記事

南極露岩域の内湾湖沼調査(第59次南極観測隊)

第59次南極観測隊に夏隊・先遣隊員として参加し、昭和基地がある東南極リュッツホルム湾の宗谷海岸で、内湾・沿岸湖沼の生態・堆積物調査を実施しました。宗谷海岸には露岩域と呼ばれる氷床に覆われていない地域が存在し、そこには100を超える湖沼が存在しています。今回は26の水域で湖底・海底堆積物の採取を行い、並行して潜水や無人探査機による生態系調査も行いました。露岩域は、最終氷期終了後の氷床融解とそれに伴う大陸隆起活動の影響を強く受けており、今後過去1万年間の氷床変動や極地生態系の発展に関する知見が得られる見込みです。



図3. 東南極リュッツホルム湾・スカルプスネス露岩域の内湾と湖沼群



図4. 氷河湖(ラングホブデ・西ハムナ池)での水質・湖底堆積物調査

(汽水域研究会情報幹事 香月興太)

第10回大会案内

汽水域研究会 2018年(第10回)三方五湖大会のご案内

汽水域研究会2018年大会は2018年10月20日(土)・21日(日)に福井県若狭町で開催します。福井県若狭町は若狭湾に面し、ラムサール条約締結湖沼である三方五湖と呼ばれる汽水の湖群があり、海や湖の資源が豊富で、古くから御食つ国として豊富な食料資源を都に供給していました。天然うなぎは「若狭うなぎ」として都で珍重されました。また、湖群の1つ、三方湖に流入するはず川河口付近にスギの丸木舟など多くの遺物を出土した鳥浜貝塚も位置し、古くから人間活動が活発であった地域です。近年は湖群の1つ水月湖には7万年分の年縞堆積物があり、この年代測定データがIntCal13に組み込まれたことで注目を集めています。

2018年9月半ばに若狭三方縄文博物館の隣に、水月湖の年縞の実物を展示した世界で初めての年縞堆積物に関する展示施設となる「水月湖年縞博物館」がオープンします。7万年分、45mの年縞堆積物がコアごとに大薄片に加工され、横に長い建物に欠損なく展示されます。世界の年縞のセクションには、ドイツアイフェル地方やエジプトカルーン湖などの年縞の実物が展示される予定です。

本大会では、福井県立三方青年の家を会場として、水月湖の年縞の分析結果の最新情報や、三方五湖の環境史や現在の問題を議論するシンポジウム等の講演をはじめ、三方五湖地域のエクスカージョンや博物館のツアーなど企画中です。多くの方の参加をお待ちしています。詳細は汽水域研究会ホームページやメーリングリストで随時アナウンスしますので、お楽しみに。

(水月湖年縞博物館・北川淳子)



図4. 水月湖



図5. 建設中の福井県年縞博物館

例会報告

汽水域研究会第6回例会(合同研究発表会)会長賞

汽水域研究会では、優秀な若手人材の育成と学生の研究意欲向上を目的として、「汽水域研究会・会長賞」と「エスチュアリー研究センター長賞」を優秀な発表を行った学生に授与している。今回「汽水域研究会・会長賞」を受賞したのは島根大学総合理工学研究科の藤井悠史君と生物資源学部の早坂裕也君。参加者の投票により、優秀さを認められ受賞した。

藤井悠史(島根大学総合理工学研究科)「静岡県浜名湖(引佐細江)における後期完新世の堆積環境の変遷」

この度は栄誉ある汽水域研究会会長賞を頂きまして、大変光栄に存じます。今回受賞できましたのは、決して自分一人の力だけではなく、エスチュアリー研究センターの瀬戸浩二准教授をはじめとする共同研究者の皆様のおかげであり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。卒業研究では何度も困難に直面しましたが、最後まで諦めることなくやり切ることができ、受賞まで至ったこと、大変嬉しく思っております。古環境研究は過去の現象に関する知見を与えるだけでなく、人間生活に関する環境問題について考察し、将来の地球環境を考える上で非常に重要な分野です。今回の私の受賞が古環境学の発展と社会的な貢献に少しでもお役に立てることを願っております。この賞を励みに、今後も一層努力を重ね、会長賞の名に恥じぬよう、より一層精進して参ります。



図6 汽水域研究会・会長賞を受賞した藤井君(右)と早坂君(左)。中央は汽水域研究会新会長の三瓶教授

早坂裕也(島根大学生物資源科学部)「宍道湖汀線域におけるシオグサ類の繁茂状況とその水質・底質に及ぼす影響」

大学・大学院の研究は、社会に対して少しでも貢献できるものでありたいと考え、私はシオグサの繁茂という地域課題を研究の題材に選び2年の学生生活をかけて研究を行ってまいりました。沢山の方々に支えて頂きながら、何とか研究をやり遂げることはでき、修士課程を卒業することができるようになったものの、肝心の社会への貢献という目標を達するような機会はこれまでなく、歯がゆい思いをしていました。そこで、少しでもの研究の成果を社会に発信できればと思い今回の発表会に参加し、その発表を評価して頂けたことを、受賞以上にとても嬉しく思っております。研究室の垣根を越えて、さらには大学の垣根さえ越えて、熱心にご協力・ご助言して下さった皆様に、心より感謝いたします。今後とも、この会で学生さんの成長と、研究者の皆様の意見交換が活発に行われますようお祈りします。

情報

● 関連学会の2018年度大会

2018日本プランクトン学会・日本ベントス学会・合同大会
日程: 2018年9月9日(日)~9月11日(火)
場所: 創価大学

日本陸水学会 第83回大会(岡山)
日程: 2018年10月5日(金)~10月8日(月)
場所: 岡山大学創立五十周年記念館ほか

日本古生物学会2018年度年会
日程: 2018年6月22日(金)~6月24日(日)
場所: 東北大学理学研究科・理学部キャンパス

おすすめ書籍



K. Weckström et al. 編(2017) Application of Paleoenvironmental Techniques in Estuarine Studies

本書は“Estuary”における古環境研究における基礎知識と最近の研究を広く扱った良書である。“Estuary”の定義や環境上の特徴に始まり、“Estuary”における古環境復元調査に用いられる器材の解説、古環境復元の指標となる微化石や元素・バイオマーカー等の説明、最近の実例の研究例が紹介されている。

環境指標として化石や有機物を取り扱った段落では、現在の生態や環境から、なぜ環境指標となりえるのかも解説している。知見を広げ、知識の再確認を行うために、読んでおきたい1冊である。

ご挨拶

新会長就任にあたって

2018年1月の総会から会長を務めることになりました三瓶(さんぺい)です。専門は有機地球化学・石油地質学で、今から28年前に中海・宍道湖の底質有機物の特徴と湖沼環境の関係に関する研究を始めて現在に至っております。副会長を引き受けてくださった入月(いりづき)俊明先生および事務局長の瀬戸浩二先生とともに、力を合わせて汽水域研究会の進展および会員の皆様方へのサービスの向上のために努力して参りたいと存じます。

汽水域研究会は2009年に「国内および国外の関連する研究者や研究機関等と連携し、全国の陸水や内湾を含めた汽水域の総合的な分野である汽水域研究を推進するための会」として高安会長のもとに発足しました。その後は中尾会長に引き継がれ、さらに国井会長のもとで安定的な活動が展開されてきました。対象とする分野は、水質、底質、生物・古生物、生態、物質循環、流動解析、音響解析、衛星データ解析、地形、環境DNA、環境改善な

ど多様であり、小規模ながら汽水域を共通項として非常に多くの分野の専門家が集結しております。汽水域研究は学際的研究でもあり人間生活にも大きく影響することから、本会には市民や行政の方々も密接に関わっておられ、会員外の方々の関心も高いことから研究発表会には多くの会員外の市民も加わって多角的な議論がなされてきました。その中でNPO法人自然再生センターとの連携も本会の発展に大きな貢献を果たしてきましたが、今後もさらに一層の交流を促進して参りたいと考えております。また本会発足時の母体となりその運営に多大な貢献を果たしてこられた島根大学汽水域研究センターは平成29年度から改組によって名称がエスチュアリー研究センター(*Estuary Research Center: EsReC*)と改名され、齋藤センター長のもと、「より広い視野から総合的に汽水・沿岸環境と生態系の研究に取り組む」こととなり、同センターとの連携もまた本会の発展には欠かせない役割を果たすことになるものと思っております。2018年1月の合同例会ではエスチュアリー研究センターが新規に3件の招待講演(記念シンポ)を設定され例会内容の充実が図られました。

このように、発足してここまで9年の間、本会は着実な歩みを進めてまいりましたが、学術的・技術的な進展の反映や多様化する社会からの要請等を意識しながら、会員の皆様方にとってより充実した情報発信や意見交換等が可能となるように、ご意見を伺いながら一体感のある会として益々存在意義が高まりますように、微力ながらも努力して参る所存でございます。

皆様方には、是非とも忌憚のないご意見とご理解・ご協力を賜りますようお願いを申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。

何卒よろしくお願い申し上げます。



2018年5月
汽水域研究会会長 三瓶良和

会員数(2018年5月25日)

正会員: 84名(-2)、賛助会員: 5名(±0)、
学生会員: 41名(+8)、計: 129名
#2017年11月30日からの増減

編集後記

最近、研究集会において国内の汽水湖を対象とした研究成果が益々充実してきました。今後、海外の研究者との連携を密にして、世界に日本の汽水域の情報を発信できるように頑張っていきたいところです。(香)

汽水域研究会ニュースレター第17号 2018年5月25日発行 編集・発行: 汽水域研究会
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 島根大学エスチュアリー研究センター内 汽水域研究会事務局
office.rgbwa@gmail.com 0852-32-6450 (phone&fax)